

# 概念メタファーの動機付けに関する一考察

韓 涛

## 1. はじめに

本稿では認知メタファー理論(the cognitive theory of metaphor、以降、CTM)における重要な概念の一つであるメタファーの動機付けについて考察する。

これまで認知言語学の枠組みにおいてメタファーの動機付けの問題に関する研究は数多く行なわれているが(Lakoff and Johnson1980、Grady 1997a、1997b、1999 など参照)、Kövecses 2002 は管見の限り、この問題を最も詳細に論じた研究の一つであるといえる。次節ではまずメタファーの動機付けの問題が Kövecses 2002 においてどのように扱われているかを概観する。

## 2. Kövecses 2002 によるメタファーの動機付けに関する研究

Kövecses 2002 では、認知言語学的立場として(i) correlations in experience、(ii) perceived structural similarity、(iii) perceived structural similarity induced by basic metaphors、(iv) source being the root of the target の四種類の動機付けが提案されている。以下、順にみていく。

### 2.1 correlations in experience

Kövecses 2002 は、correlations in experienceによって動機付けされるメタファーの典型例としてMORE IS UP<sup>1</sup>とPURPOSES ARE DESTINATIONSの二つを挙げている。例えば、容器

---

<sup>1</sup>本稿ではメタファーの英語表記はすべて大文字で統一する。



### 2.3 perceived structural similarity induced by basic metaphors

Kövecses 2002 によれば、前節でみた perceived structural similarity が存在のメタファーによってもたらされる(induced) ケースがあるという。例えば、IDEAS ARE FOOD というメタファーの目標領域である IDEAS と起点領域である FOOD の間には(2)に示されるような perceived structural similarity が観察される。

- (2) a. cooking           ⇒ thinking
- b. swallowing       ⇒ accepting
- c. chewing           ⇒ considering
- d. digesting         ⇒ understanding
- e. nourishment      ⇒ mental well-being

(Kövecses 2002:73)

Kövecses 2002 は、この種の類似性を引き起こすものとして心(mind)に関する導管メタファー<sup>3</sup>の存在、さらに身体に関する一連の非メタファー的な想定(例えば、身体は容器であることや食べ物は物や物質からなること、我々は食べ物を身体の外から内へと取り込むことなど)を挙げている。存在のメタファーが極めて基本的なものであるがゆえに、IDEASとFOODのような概念的にかけ離れた二つの領域からも類似性を知覚することができると論じている。

### 2.4 source being the root of the target

Kövecses 2002 は、source being the root of the target という動機付けは生物学的(biological)な場合と文化的(cultural)な場合の二つのケースに分けられるとし、前者についてはLOVE IS BOND、LOVE IS A UNITY、AFFECTION IS CLOSENESSを、後者についてはARGUMENT IS WAR、SPORT IS WARなどを用いてそれぞれ実証している。具体的には、上記のLOVEやAFFECTIONのメタファーにおけるBOND、CLOSENESSといった起点領域は、例えば親子或は恋人同士の間に見られるような生物学的に定められた状態や出来事を表していることから、目標領域の源泉(“root”ないし“origin”)に相当すると考えられるとし、一方、ARGUMENTやSPORTという目標領域は歴史的にWARから発展してきた

---

<sup>3</sup>導管メタファーについてはReddy1979やLakoff and Johnson 1980などを参照されたい。

概念だと考えられるとしている。

### 3. Kövecses 2002 における問題点と不足点

#### 3.1 共起性と類似性の関係について

本節では共起性と類似性の関係に焦点を当て、Kövecses 2002 がいう共起性には実際には類似性が関与している可能性が高いことを主張する。

次の(3)のような記述から、Kövecses 2002 では、共起性について類似性とは異なる概念と見なされているといえる。

(3) If event  $E_1$  is accompanied by event  $E_2$  (either all the time or just habitually),  $E_1$  and  $E_2$  will not be similar events; they will be events that are correlated in experience.

(Kövecses 2002:69)

この考え方に従えば、コップの中により多くの水を入れるという出来事( $E_1$ )と、これに伴う水嵩が増すという出来事( $E_2$ )の間には共起性しか見いだせず、類似性の可能性は排除される。しかしよりダイナミック(ないし動的)な視点からみれば、Kövecses 2002 のいう共起性にさらに類似性が関与している可能性も否定できない。これについて、杉本 2006 は次のように述べている。

「しかし、primary scenes<sup>4</sup>が何度も何度も経験される、ということは、個々の個別の primary sceneに関わる経験が『同じ種類の経験』であるということが保証されなければならない筈である。そうでない限り複数ある個々の個別の primary scenesの間に関連性が見いだせず、個々の primary sceneは経験される度に異なるものとして理解されることになってしまう。」(杉本 2006:515)

以上の引用からも分かるように、共起性と類似性は相容れない関係にあるのではなく、相互作用の関係にあると考えられる。

#### 3.2 単一動機付けの立場の問題点

前節で述べた通り、Kövecses 2002 では共起性と類似性は相容れない関係にあると想定

---

<sup>4</sup> Primary scene という用語は、例えばコップに水を入れるというような基本的な出来事の中に同時に(二つの異なる側面(例えば、水の量の増加と水嵩が増す)を経験するという意味で Grady1997b が最初に用いた用語である。

されている。これは、言い換えればあるメタファーが共起性によって動機付けされる場合、同時に類似性によっても動機付けされるというケースは存在しない(逆も成立する)ということの意味する。本稿では、このような、あるメタファーの動機付けは共起性か類似性かのいずれかであるとする立場を、単一動機付け(single motivation)の立場と呼ぶことにする。この単一動機付けの立場は経験的・理論的に支持されない可能性が高いことについてはすでに第3.1節で言及したが、ここではさらに具体例を提示する。

例えば、Kövecses 2002 の考えに従えば、LOVE IS A JOURNEY というメタファーは LIFE IS A JOURNEY の具体例の一つとみなされ、その動機付けは LIFE IS A JOURNEY と同様、PURPOSES ARE DESTINATIONS の共起性基盤を受け継ぐため、共起性であるとみなされるであろう。しかし、(4)が示している通り、LOVE と JOURNEY の間には明らかに perceived structural similarity が想定されうる。

- (4) 出会い ⇒ 出発地
- 付き合う ⇒ 旅の途中
- 結婚 ⇒ 目的地

さらに、あるメタファーが共起性によって動機付けされると同時に、類似性にも動機付けされうるのであれば、Grady 1999 が提案した共起性と類似性に基づく類型論も現実には妥当ではない可能性が非常に高くなる。これに対して本稿では複数動機付けの仮説(立場)を提案する(詳しくは第4節を参照されたい)。

### 3.3 動機付けとしてのイメージ・スキーマと評価性(鍋島 2002、鍋島 2007)

本節では、Kövecses 2002 で言及されていないメタファーの動機付けの種類について、鍋島 2002、2007 を取り上げる。

従来の CTM では、イメージ・スキーマは主にメタファー写像の内容として想定されてきたが、鍋島 2002 は動機付けとしてのイメージ・スキーマの可能性を論じている。

- (5) 金が溢れる/金をためる/金を搾り出す/湯水のように金を使う
- (6) 駅からずっと甲子園に行く人の流れが続いている。/コンサートホールは熱狂的なファンで溢れ返っている。/陽子は人波に飲まれていった。

(例(5)、(6)は鍋島 2002:80 から引用)

鍋島 2002 によれば、例(5)、(6)が示している〈金や群集は水〉というメタファーの動機付け

を考える際に、感情や言葉の場合は共起性<sup>5</sup>という動機付けが想定されるのに対し、金や群集の場合は、水との共起性はなく、かわりに集合体のイメージ・スキーマが領域をつなぐものとして想定されるという。

また、鍋島 2007 では、メタファーの動機付けのもう一つの種類である価値的類似性<sup>6</sup>について論じられている。

(7)あの人はこの組織の癌だ/函館・道南の自民党。特に 8 区支部では今や「ガン」がまん延

(8)汚れ仕事/汚れた心/汚れた金/汚れなき心などありますか？

(9)この世は歪んでいる/行政の歪み/「NHK 報道(震災から 5 年)の歪みを糾す！」

(例(7)～(9)は鍋島 2007:192 から引用)

鍋島 2007 は、価値評価を伴うと思われる「癌」、「汚れ」、「歪み」などの用語を事例として挙げ、これらを含む例(7)～(9)はいずれもメタファー表現であることから、価値評価性はメタファーを形成しやすいと述べている。

注意すべき点は、Kövecses 2002 では、上記のイメージ・スキーマによる構造的な類似性や価値的類似性について触れていないが、スキーマと事例の観点に立てばこれらのケースはいずれも Kövecses 2002 のいう perceived structural similarity の具体例に当てはまるという点である。

#### 4. 複数動機付けの提案

ここまでの議論を踏まえて、本節ではメタファーの動機付けについて複数動機付け(multiple motivations)の仮説を提案する。以下、(i)共起性と類似性が共存するケース、(ii)共起性とシネクドキーが共存するケース、(iii)複数の類似性が共存するケースに分けて具体例とともにその可能性を検討する。

##### (i) 共起性と類似性の共存

すでに第 3.1 節で述べたように、共起性と類似性は経験的・理論的に相互作用(ないしは協業)の関係にあると考えられる。この主張を支持する例としては、第 3.2 節で挙げた LOVE

<sup>5</sup> この場合の共起性として、例えば、「人間の体の多くが水分からできており、感情的になると涙や鼻水がでることなど」(鍋島 2002:81)が挙げられる。

<sup>6</sup> 鍋島 2007 によるとこの用語は価値、価値判断、評価性、Value Judgment、positive/negative evaluation といった用語と同義であるという。

IS A JOURNEY のほかに、Cox1999 で検討された PITCH IS A VERTICAL SCALE が挙げられる。Takada 2006 の報告によると、Cox1999 の分析ではこのメタファーの動機付けは、次にみる六つのステップによって説明されるという。

- (10) a. the amount of physical energy mediated by MORE IS UP(correlation)
- b. the length of and strength on vocal cords(cause/effect)
- c. body parts that resonate(effect)
- d. height of sound propagation(effect)(correlation)
- e. the level of impact(effect)(shared with another mapping: *low* for *low* volume)(correlation)
- f. high pitch associated with saliency, or figure-ground relationship (resemblance<sup>7</sup>)

(10)からも分かるように、PITCH IS A VERTICAL SCALE というメタファーには共起性((a.d.e)参照)と類似性((f)参照)が両方関与しているほか、「原因-結果」のメトニミーも関与しているのである。

#### (ii) 共起性とシネグドキーの共存

第 3.1 節では共起性と類似性は経験的・理論的に協業・共存関係にあると述べたが、共起性とシネグドキーも同様に協業・共存関係にあると考えられる。例えば、我々が日常的に(二つの)異なる側面(例えば、量と垂直性)を持つ基本的な出来事(「コップに水を入れる」、「積み木をする」など)に何度も遭遇し、経験するという作業は主に知覚レベルにおいて行なわれるが、複数の出来事(つまり事例)からメタファー(つまりスキーマ)が抽出されるという認知的作業は主に概念レベルにおいて行なわれると考えられる<sup>8</sup>。この分析が正しければ、共起性は類似性に加えてシネグドキーとも協業・共存関係にあると想定される。従って第 2.2 節でみた MORE IS UP や PURPOSES ARE DESTINATIONS などの共起性に基づくメタファーはすべてシネグドキー的な認知プロセスをも経ているといえる<sup>9</sup>。

#### (iii) 複数の類似性の共存

<sup>7</sup> resemblance は Grady1997b で用いられる用語で、perceived structural similarity 或は emergent similarity と置き換えることが可能である。

<sup>8</sup> ここでいう知覚レベルと概念レベルは鍋島 2006 が定義したものに準じる。詳しくは鍋島 2006 を参照されたい。

<sup>9</sup> ただし、このように結論付けるにはメタファーの動機付けを、領域をつなぐもの(鍋島2002、2006、2007など参照)と定義するのではなく、メタファーの成立する前提(Barcelona2000 参照)と広く定義する必要がある。

メタファーが複数の類似性によって動機付けされるケースは中国語の〈钱是水〉という具体例からも確認できる。

日本語の〈金は水〉は鍋島 2002 の分析によれば、その動機付けは共起性ではなく、イメージ・スキーマであるとされている(第 3.3 節参照)。一方、例(11)が示すように、このメタファーは中国語においても存在する。

(11) 現金的流动/现金流量/花钱如流水<sup>10</sup>

日本語同様、中国語の〈钱是水〉も“钱”と“水”の間に共起性を想定しにくい。仮に、金で水を買うような場面が考えられるとしても、恣意的であり、頻度も高くないことから領域をつなぐものとしては不十分であると思われる。しかし以下にみるように、両者をつなぐものとして複数の類似性を想定することが可能である。

まず、日本語の場合と同様に、両者には集合体のイメージ・スキーマによる構造的類似性がみられる。例(12)が示すように、金に関する日常的経験の中から集合体のイメージ・スキーマが抽出されうる。

(12) 大把大把的票子/大把大把地花钱/大量的现金

一方、水に関しても同様に集合体のイメージ・スキーマが抽出されうる。従って両者をつなぐものとしてまず集合体のイメージ・スキーマによる類似性が考えられる。

しかしながら、集合体のイメージ・スキーマだけを想定するだけでは不十分である。なぜなら集合体のイメージ・スキーマを持つ事例としては、水以外にも多くの事例が考えられるためである(事実として中国語には“挥金如土”という表現が存在する)。つまり起点領域として選ばれたものは集合体のイメージ・スキーマ以外に、さらに何らかの動機付け(ないしは制約)が存在すると考えられる。ここではまず、これを経路のイメージ・スキーマであると仮定する。確かに金に関する日常的経験の中には、例えば“财源/存钱”が表すように、金に関する起点や終点のイメージ・スキーマが想定されるようなケースも存在する。しかし、次の例(13)が示すように、金に関してはその移動の経路も重要な側面であるといえる。

(13)a. 股票市场上的走势就是资金的流动。

b. 他们看到的是金钱滚滚、更加诱人的巨大市场。

c. 在帝俄时代，证券的息票往往当现金流通。

例(13a)～(13c)にみられるようなメタファー表現は集合体のイメージ・スキーマと経路のイメ

<sup>10</sup>本稿で用いる中国語の例文はすべて CCL 語料庫(北京大学中国語学研究中心)によるものである。



ージ・スキーマとが合わさった結果であると考えられる。

さらに、中国語の“白花花の流水”に対しては、“白花花の银子/票子”という表現が存在する。これは“钱”と“水”の間に視覚的類似性も存在していることを示唆している。

このほか、鍋島 2007:196 は、「八事は名古屋の自由が丘だ」という表現における「八事」と「自由が丘」の類似性の検出は、中心から少し離れているという構造的類似性といふ雰囲気という価値的類似性の協業によるとしている。これも複数の類似性の共存を裏付ける具体例の一つであると考えられる。

## 5. おわりに

本稿では、CTM におけるメタファーの動機付けという重要な概念について、Lakoff and Johnson 1980 以降のメタファーの研究書として高い評価を得ている Kövecses 2002 を取り上げて概観した。そのうえで Kövecses 2002 にみられる幾つかの問題点と補足が必要な点についても言及した。最後に、メタファーの動機付けについて単一動機付けではなく、複数動機付けの仮説を提案し、具体例とともにその可能性を検討した。

本稿が提案する複数動機付けの仮説は、メタファーの成り立ちを記述するうえでは有益なことであると思われるが、それを支持するような心理学的な証拠は、管見の限りまだ得られていない<sup>11</sup>。その意味で複数動機付けの心理的実在性については今後さらに研究を進めていく必要がある。

### [主要参考文献]

- Barcelona, Antonio. 2000. On the plausibility of claiming a metonymic motivation for conceptual metaphor. *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*. pp.31-58. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Cox, A. 1999. *The metaphoric logic of musical motion and space*. Ph.D. dissertation, University of Oregon.
- Grady, Joe. 1997a. THEORIES ARE BUILDINGS revisited. *Cognitive Linguistics* 8(4),

---

<sup>11</sup>寺西 2009 は、心理実験の方法を用いてメタファー拡張は多段階であるという結果を得ている。

pp.267-290.

Grady, Joe. 1997b. *Foundations of meaning: Primary Metaphor and Primary Scenes*. Ph.D. dissertation: University of California at Berkeley.

Grady, Joe. 1999. The typology of motivation for conceptual metaphor: Correlation vs. resemblance. In R. Gibbs and G. Steen(Eds.), *Metaphor in cognitive linguistics*. pp.79-100. Philadelphia: John Benjamins.

Kövecses, Zoltan. 2002. *Metaphor: A practical introduction*. Oxford: Oxford University Press.

Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.

Takada Mari. 2006. The typology of metaphors based on motivation: Correlation vs. resemblance revisited. *Papers from the National Conference of the Japanese Cognitive Linguistics Association* 6, pp.245-255.

鍋島弘治朗 2002.「メタファーと意味の構造的性:プライマリー・メタファーおよびイメージ・スキーマとの関連から」『認知言語学論考 No.2』ひつじ書房 pp. 25-109.

鍋島弘治朗 2006.「認知メタファー理論における知覚レベルと概念レベル—プライマリー・メタファーおよびアナロジーとの関連から—」『日本認知言語学会論文集』第 6 巻 pp.256-265.

鍋島弘治朗 2007.「領域をつなぐものとしての価値的類似性」楠見孝(編著)『メタファー研究の最前線』ひつじ書房 pp. 179-199.

杉本孝司 2006.「メタファと意味理解」『日本認知言語学会論文集』第 6 巻 pp.508-517.

寺西隆弘 2009.「身体性に基づくイメージ拡張:STRAIGHTNESSとCROOKEDNESSに関わるメタファーを材料として」『日本認知言語学会論文集』第 9 巻 pp.404-413.